

ひたちなか 埋文だより 48



多賀山地で地質を観察する 日立市郷土博物館の田切美智雄さん指導のもと、多賀山地の地質を観察しました。ジオネット日立の方々のサポートで東連津川を渡り、岩石の露頭へと辿り着きます。まるで人類史と自然史の関わりのように、考古学は、地質学から多くの恩恵を受けています。ともにフィールドの学問であり、他者を案内して「私の庭」と表現できるほどの研究領域の形成には、鍛練の積み重ねが必要です。学び続けることの極みを、そこに見出すのです。

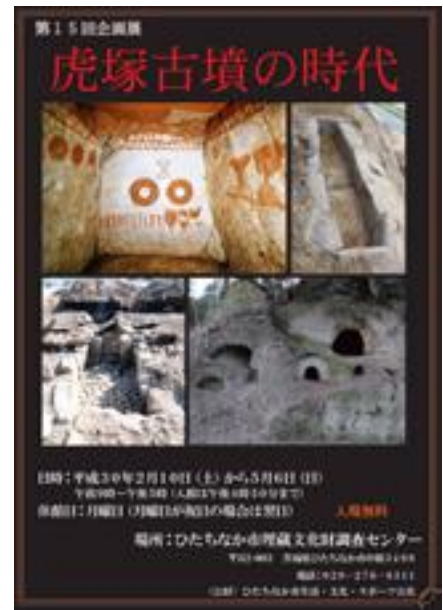
(2017.9.30 ふるさと考古学®石を見にいこう)

CONTENTS	第15回企画展 虎塚古墳の時代／公開講座「ひたちなか市の考古学」第11回	
	「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」 第20回 遺跡保存・活用の新たな方向を目指して (川崎純徳)	
	資料紹介 木葉の底 一茨城県北部域における弥生式土器の底面痕跡一 (鈴木素行)	
	只今ピラミッド建設中！ 一ふるさと考古学ワークショップでの試み一 (梅田由子)	
	横穴墓を歩く⑱ 合戦原遺跡の横穴墓群 (山田隆博)	ひたちなか市内の発掘調査 2017
	1ケース・ミュージアム 44 市内遺跡発掘調査 2016	ひたちなか市の古墳⑪ 田彦古墳群・相対古墳群
	歴史の小窓⑳ 祭りのおたのしみ	虎塚古墳花便り⑳ タチツボスミレ ほか

第15回企画展

虎塚古墳の時代

2018年2月10日(土)～5月6日(日)



虎塚古墳の時代

古墳の形と大きさに被葬者の身分階層を示す政治機構は、古墳時代の最初から六世紀末頃まで続いていました。それが七世紀に入ると大きな変化が現れます。茨城県では七世紀初頭頃を最後に前方後円墳の築造が停止するのです。ひたちなか市では、虎塚古墳やおおたらい大平古墳群第一号墳が最後の前方後円墳となり、それ以降は方墳や円墳などへ変化します。また、最新の調査から、七世紀前半から横穴墓という新しい墓制である十五郎穴横穴墓群が出現してくることが判ってきました。さらに、臨海部の磯崎東古墳群では、墳丘を持たない石棺墓という特異な墓もこの時期に造られている可能性があります。このように、虎塚古墳が造られた時代は、高塚の古墳、横穴墓、石棺墓といった様々な墳墓が多く造られた時代といえます。今回の企画展のポスターに様々な埋葬施設を並べているのは、それを表現したかったからです。

虎塚古墳と十五郎穴横穴墓群

虎塚古墳の大きな特徴は装飾古墳であるということです。凝灰岩の壁面に白土を塗り、その上に赤色顔料であるベンガラで文様を描いています。文様は線刻と彩色を併用した技法を用いており、文様の類似と併せて検討すると、装飾古墳のふるさとである熊本県菊池川流域との関連性が考えられます。また、十五郎穴横穴墓群についても、横穴墓の源流は九州地方に求められます。先ほど触れましたように、最近の調査によって十五郎

穴墓の源流は九州地方に求められます。先ほど触れましたように、最近の調査によって十五郎

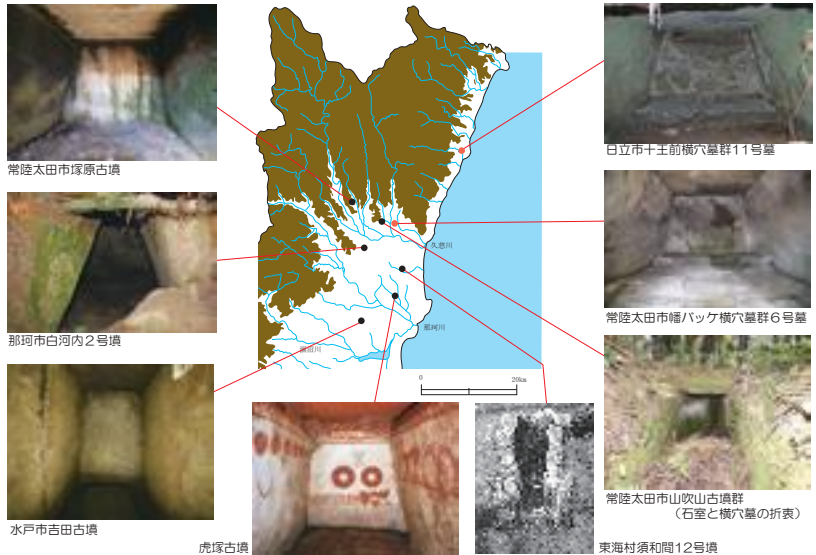


展示のようす

穴横穴墓群の出現が虎塚古墳とほぼ同じ時期と考えられるようになりました。よって、虎塚古墳と十五郎穴横穴墓群は密接な関係を持ち、装飾古墳と横穴墓といった新たな墓制をこの地に採用した集団の存在が窺えます。

独自性と共通性 虎塚古墳は装飾古墳といった当地域では独自の墓制ですが、虎塚古墳の石室形態は凝灰岩の切石を使用し断面形が台形となるように組み立てる「凝灰岩切石台形組石室」と呼ばれるもので、茨城県北域に特有の形態を採用しています。この石室形態は、久慈川流域と十王川流域の玄室が台形を呈する「台形型横穴墓」とも酷似しています。また、常陸太田市山吹山古墳群や幡山古墳群には、岩盤を「台形型横穴墓」のように掘り下げ、天井部のみに切石を使用するといった、古墳と横穴墓の折衷形ともいえる古墳にもみられます。以上のように、石材や形態の類似は、工人集団間に強固な関係が存在していたことを示唆しており、それはすなわち県北地域の集団的帰属意識・「われわれ意識」を表していると思われる。つまり、虎塚古墳には装飾古墳であるという独自性と、県北域に特有の石室構造という共通性を併せ持つ古墳といえます。

海を介した共通性 茨城県北域には石室構造以外にも共通性が見られるものがあります。それは須恵器のフラスコ型長頸瓶です。フラスコ型長頸瓶は、茨城県内ではそのほとんどが墳墓



主な凝灰岩切石台形組石室と台形型横穴墓の分布

から出土するため、葬送儀礼に使用することを主目的とする土器と考えられています。つまり、共通の儀礼を行っていたと言うことです。

この土器の主な生産地として有名なのは、静岡県湖西市の湖西窯跡群です。湖西窯跡では七世紀中葉頃から生産量が爆発的に増大するとされ、その製品の分布は西は畿内、東は関東から太平洋沿岸地域を中心とした東北地方北端の青森県八戸地域まで一挙に広がり、八世紀前葉頃



常陸太田市幡山東横穴墓群出土フラスコ形長頸瓶

まで流通し続けます。茨城県内では、搬入されたとと思われるものが十五郎穴横穴墓群や日立市坂下横穴墓群、常陸太田市幡山東横穴墓群などで出土しています。

東海産の須恵器が流通した背景には、六世紀以来の駿河西部域の在り首長層が海運力によって築き上げた東日本太平洋沿岸地域の諸処の首長層との相互関係のネットワークが基盤となっていると考えられています。このことは、古墳時代においてヤマト政権主導ではない、地域を主体とする地域間交流が展開されていた可能性を示唆する事例と言えます。

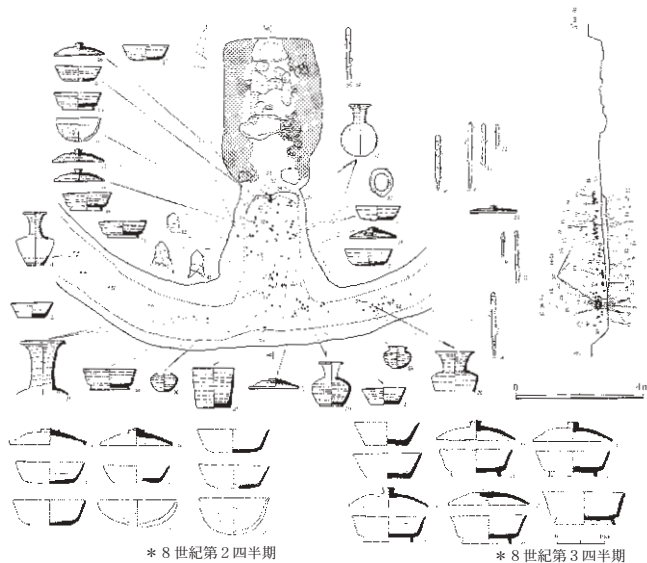
古墳の終わり 市内で最後の古墳と考えられるものに、三反田古墳群飯塚前古墳があげられます。飯塚前古墳の大きな特徴は、東西約30m、南北約20mという規模を有する長方形という墳形です。また、地下探査により二基の石室が並んで存在している可能性が濃厚となりました。長方形という墳形は、あらかじめ二基分の石室の構築スペースを確保するための墳形で、畿内の古墳との共通性が指摘されています。このような畿内的な古墳が、首長墓と考えられる虎塚古墳群や笠谷古墳群、大平古墳群とは違う場所に存在することは注目されます。

古墳を造る行為は、おそらく七世紀で終焉を迎えるものと考えられます。しかし、八世紀以降も古墳を利用するという行為は行われていたようです。その証拠として古墳や横穴墓では、

造墓が7世紀前半代と考えられるものでも、出土する土器の中には七世紀末から九世紀の年代のものが含まれる例があります。茨城県の例では、水戸市ニガサワ古墳群第一号墳と常陸大宮市赤岩遺跡第一号墳があります。ニガサワ古墳群第一号墳からは七世紀後半、七世紀末〜八世紀前半、八世紀中葉〜後半、九世紀後半の四つの時期の土器が、赤岩遺跡第一号墳からは七世紀後半、八世紀第一四半期、八世紀第二四半期、八世紀第三四半期の四つの時期の土器が出土しています。ひたちなか市でも、十五郎穴横穴墓群館出支群I区第三二・三三・三五号墓や虎塚古墳群第五号墳から、八世紀第二四半期〜九世紀前半の土器が出土しており、古墳や横穴墓が造られた時期と土器との時期に差が生じています。これらの例からは、古墳の造墓自体はおそらく七世紀後半に終わりを迎えますが、八世紀以降は追葬行為もしくは先祖崇拜として墓を利用するという行為のみが継続していたと考えられます。こういった墳



長方形墳の三反田古墳群飯塚前古墳



古墳の再利用例 (常陸大宮市赤岩遺跡第1号墳)

墓の再利用については、畿内を対象として分析を行った渡邊邦雄氏の研究成果を援用すると、当地域の氏族が出自の再確認や系譜を主張するために墳墓を再利用したものと考えられます。

以上のように、古墳の築造は七世紀という所謂「古墳時代」に終わるといえますが、再利用という行為も含めると「古墳の終わり」は平安時代まで時期が下がることになります。

(稲田健二)

参考文献 渥美賢吾二〇一一「関東系土師器と湖西産須恵器と―土器のうごきからみた7世紀の東国」『東国の地域考古学』六一書房/渥美賢吾二〇一三「律令制成立期前後の墓前祭祀における土器様相の側面―水戸市ニガサワ1号墳出土土器をめぐって」『茨城県考古学協会誌』第二五号 茨城県考古学協会/渡邊邦雄二〇〇〇「律令墓制における古墳の再利用―近畿地方の8・9世紀の墳墓の動向」『考古学雑誌』第八五巻第四号 日本考古学会

* 今回の企画展の開催及び本誌への記事の掲載にあたっては、以下の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。
東海村教育委員会・日立市郷土博物館・常陸太田市教育委員会、猪狩俊哉・沼田胡桃・山口憲一 (50音順・敬称略)

公開講座「ひたちなか市の考古学」第二回
古墳時代の終わりを探る

平成三〇年二月一七日から三月一〇日の毎週土曜日に、公開講座「ひたちなか市の考古学 古墳時代の終わりを探る」を開催しました。講師には、古墳時代の研究者をお招きして、最新の研究成果をもとに、古墳時代の終わりについてご講演を頂きました。

なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。



月/日	演 題	講 師
2 / 17 (土)	古墳の終わり	国立歴史民俗博物館 松木 武彦 氏
2 / 24 (土)	栃木県の南部の終末期古墳	日本考古学協会 小森 哲也 氏
3 / 3 (土)	ひたちなか市の古墳の終わり	(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 稲田 健一
3 / 10 (土)	東日本の古墳の終わり	東京学芸大学 日高 慎 氏



東京学芸大学
日高 慎 氏

「前方後円墳が造られている時代よりは一段階新しくなった時期に、いわゆる首長墓のような大きな古墳では、横穴式石室という重たい構造物の地盤をもたせるために版築という古代寺院の技術を導入していきます。このように古墳時代の終末期では、古墳築造に古代寺院の技術というが入ってくるのが一つの特徴だろうと思っています。」



日本考古学協会
小森 哲也 氏

「6世紀末から近畿地方のトップは、方墳そして八角というふうに変形を換えていきます。その時に東国では、でっかい円墳や方墳を造っています。前方後円墳は造っていません。そうすると、前方後円墳で力を示している時代というのは終わっていても、関東地方では大型の円墳や方墳で力を示しているんだらうなと思います。しかも、それを畿内は認めていますね。」



国立歴史民俗博物館
松木 武彦 氏

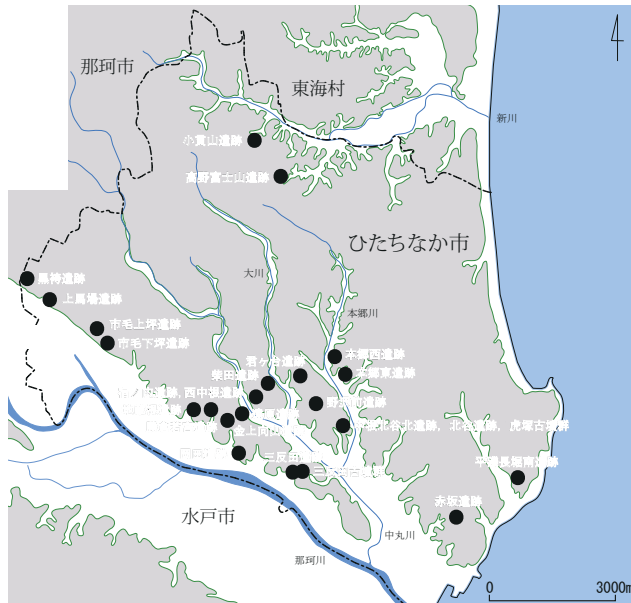
「仏教に帰依しなかった敏達天皇までが前方後円墳で、仏教に帰依した用明天皇が方墳を採用していることは、これはやはり仏教の浸透と前方後円墳の廃絶との間になんらかの関係があったのではないかと考えさせるわけです。用明天皇以降はもう前方後円墳に葬られる大王はいなくなって、西日本ではほとんど前方後円墳は消えてしまいます。」



二〇二二年度の発掘調査で十五郎穴横穴墓群館出支群Ⅰ区第35号墓から出土した大刀一口、刀子五口、鉄鏃一九点、鉄釘一八一点、土器五八点点など二六六点が、二〇一七年一〇月にひたちなか市指定文化財に指定されました。

また、館出支群Ⅰ区第35号墓等の十五郎穴の調査をまとめたパンフレットを二〇一八年二月に刊行しました。パンフレットは埋文センター等で無料で配布しています。

十五郎穴横穴墓群館出支群Ⅰ区第35号墓出土遺物が、ひたちなか市指定文化財に指定されました！



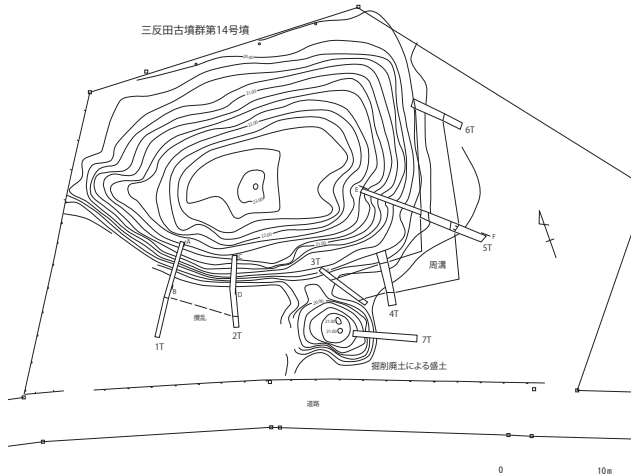
三反田遺跡の発掘調査 みたんだ
 三反田遺跡は、ひたちなか市立三反田小学校のあたりに広がる古墳時代前期を中心とした集落遺跡です。1973年(昭和48年)から1990年(平成2年)にかけて、5回の発掘調査が行なわれ、古墳時代の住居跡19基、古墳1基が調査されました。それら調査の成果は発掘調査報告書にまとめられ、刊行されています。ぜひ、埋文センターやひたちなか市立図書館などでご覧になってください。

このような過去の発掘調査によって、三反田小学校の敷地には、ひたちなか市を代表する古墳時代前期の集落跡が埋もれていることが明らかになりました。そしてその場所で、2017年(平成29年)の9月から10月にかけて、校舎の建て替えに伴う発掘調査が久しぶりに実施されたのです。

調査をしてみたところ、古墳時代前期の竪穴住居跡が6基、平安時代の竪穴住居跡(1B号住)が1基見つかりました。どの住居跡も、住居跡の一部の調査でしたが、2号住居跡では、床に掘られた穴の壁に貼り付いたような状態で、古墳時代前期の土器がたくさん出土するという成果もありました。

調査が終わった今は、発掘現場で作成した図面を清書したり、出土した遺物の図面を作ったりといった、室内での作業を実施しています。こうした貴重な成果は、来年度に発掘調査報告書として刊行される予定です。

二〇一七年度は、ひたちなか市内において、試掘調査二四件、本調査四件を実施しました。三反田古墳群では、第一四号墳の墳丘測量を実施するとともに、墳丘の周囲を数力所試掘してみました。その結果、第一四号墳は、墳丘長さ三〇メートル以上の長方墳になる可能性が出てきました。三反田古墳群の西端には、墳丘長さ三〇メートルの長方墳となる飯塚前古墳があるので、同じ古墳群の東西に長方墳があることになり、その意味が今後問題となることでしょうか。市毛上坪遺跡では、古墳時代中期の住居跡から、完形の杯が床面に置かれた状態で多量に出土しました。ひたちなか市における古墳時代中期土器の基準資料といえます。(佐々木義則)



三反田古墳群第14号墳



三反田遺跡第2号住居跡

2017 (平成 29) 年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	回数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	きみがだいせいせき 君ヶ台遺跡	11 次	中根	試掘	4 月	住居跡 1 基 (奈良) を確認。須恵器, 土師器が出土。
2	あかさいせいせき 赤坂遺跡	3 次	鶴代	試掘	4 月	溝跡 1 条を確認。
3	こうやふじやまいせいせき 高野富士山遺跡	9 次	高野	試掘	4 月	土師器, 須恵器が出土。
4	いちげかみつほいせいせき 市毛上坪遺跡	17 次	市毛	試掘	5 月	住居跡 2 基 (古墳) を確認。土師器が出土。
5	かつくわわかみやいせいせき 勝倉若宮遺跡	5 次	勝倉	本調査	5 月	住居跡 2 基 (古墳 1, 平安 1), 土坑 1 基を調査。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 鉄製品が出土。
6	ほんこうひがしせいせき 本郷東遺跡	6 次	馬渡	試掘	6 月	なし
7	のざわまいせいせき 野沢前遺跡	2 次	中根	試掘	7 月	住居跡 1 基 (平安), 土坑 1 基を確認。須恵器, 土師器, 弥生土器が出土。
8	しばたせいせき 柴田遺跡	5 次	中根	試掘	8 月	土坑 1 基を確認。
9	おかだいせいせき 岡田遺跡	30 次	三反田	試掘	8 月	なし
10	かねあげむかいやまいせいせき 金上向山遺跡	3 次	三反田	試掘	9 月	住居跡 1 基 (平安) を確認。土師器, 須恵器, 石器が出土。
11	いちげしもつほいせいせき 市毛下坪遺跡	13 次	市毛	試掘	9 月	住居跡 4 基 (古墳 3, 平安 1) を確認。弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
12	くろぼかまいせいせき 黒袴遺跡	6 次	津田	試掘	10 月	なし
13	みたんだいせいせき 三反田遺跡	7 次	三反田	本調査	9 月	住居跡 7 基 (古墳 6, 平安 1) を調査。旧石器, 縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 石器, 鉄製品が出土。
14	ほんこうにしせいせき 本郷西遺跡	1 次	馬渡	試掘	11 月	なし
15	いちげかみつほいせいせき 市毛上坪遺跡	18 次	市毛	試掘	11 月	住居跡 3 基 (平安 2, 時期不明 1) を確認。縄文土器, 土師器, 須恵器が出土。
16	こうやふじやまいせいせき 高野富士山遺跡	10 次	高野	試掘	11 月	住居跡 3 基 (古墳~奈良), 溝 1 条, ビット 5 基を確認。土師器, 須恵器, 石器が出土。
17	みたんだいせいせき 三反田古墳群	2 次	三反田	試掘	12 月	長方墳 1 基を確認。
18	しほくのうちせいせき 宿ノ内遺跡 しなかねいせいせき 西中根遺跡	4 次 4 次	中根	試掘	12 月	住居跡 1 基 (古墳) を確認。土師器, 須恵器が出土。
19	おかだいせいせき 岡田遺跡	31 次	三反田	試掘	1 月	溝 1 条, 土坑 1 基を確認。縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶磁器が出土。
20	いちげかみつほいせいせき 市毛上坪遺跡	19 次	市毛	本調査	1 月	住居跡 4 基 (古墳 2, 平安 2), 土坑 9 基を調査。土師器, 須恵器, 鉄製品, 石製品が出土。
21	おめきやまいせいせき 小真山遺跡	2 次	高野	試掘	1 月	なし
22	かみほいせいせき 上馬場遺跡	5 次	津田	試掘	1 月	ビット 1 基を確認。
23	じぞうねいせいせき 地藏根遺跡	3 次	勝倉	試掘	2 月	なし
24	とらばらいせいせき 遠原遺跡	4 次	金上	試掘	3 月	住居跡 1 基 (時期不明) を調査。縄文土器, 須恵器が出土。
25	ひらいそながほりかみいせいせき 平磯長堀南遺跡	2 次	平磯	試掘	3 月	溝 1 基を確認。
26	いちげかみつほいせいせき 市毛上坪遺跡	20 次	市毛	試掘	3 月	住居跡 2 基 (時期不明), 溝 1 基を確認。旧石器, 縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器が出土。
27	とらづかごみんぐん 虎塚古墳群 きたやいせいせき 北谷遺跡 なかにぎたやまいせいせき 中根北谷北遺跡	12 次 3 次 2 次	中根	試掘	12 月 ~3 月	住居跡 10 基 (平安 5, 時期不明 5), 溝 5 条, 土坑 3 基, ビット 11 基を確認。旧石器, 縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 鉄製品, 陶磁器が出土。

※この他, 毛野考古学研究所により高野富士山遺跡第 11 次調査 (本調査) が実施されました。

歴史の小窓 その二〇

祭りのおたのしみ

丸底で、頸の部分に波のような模様が付けられた高さ五三センチもある大きな甕は、ひたちなか市にある津田西山古墳群の円墳墳頂部あたりから出土したものです。頸部の波状文が沈線であることや、粘土の特徴からみて、九世紀に水戸市木葉下窯跡群で焼かれたものと考えられます。

こうした須恵器



の大甕は、酒の醸造に用いられることがありました。当時の酒は、発酵した蒸し米に水を加えて甕に仕込んだ、ドロクのような濁酒でした。木の蓋をして、上を布で覆っていたようです。春や秋の祭りの日、長寿や厄除けなど、さまざまな祈りを込めて、村人たちが魔よけの酒を酌み交わしたのではないかと、いわれています。(佐々木義則)

参考文献 荒井秀規「神に捧げられた土器」『文字と古代日本 4 神仏と文字』吉川弘文館 二〇〇五、宮本馨太郎「めし・みそ・はし・わん」岩崎美術社、余語琢磨「ミカ」名をもつ須恵器「古代」九一 早稲田大学考古学会、鴨志田篤一ほか「津田西山古墳群出土の須恵器甕」『茨城県考古学協会誌』第二三三号



展示のようす

ひたちなか市には三〇〇を超える遺跡があります。そうした遺跡に住宅やアパートなどが建築される際には、事前に試掘調査を実施します。試掘調査は、市教育委員会からの委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツセンターが実施しています。

試掘調査によって古代の住居跡などが確認された場合には、その保存について話し合いが行われます。話し合いの結果、保存することが難しい場合には、発掘調査が行われます。

なお二〇一六年度は、試掘調査二七件、発掘調査四件が実施されました。今回のワンケース・ミュージアムでは、そうした調査で出土した遺物の展示解説をおこないました。

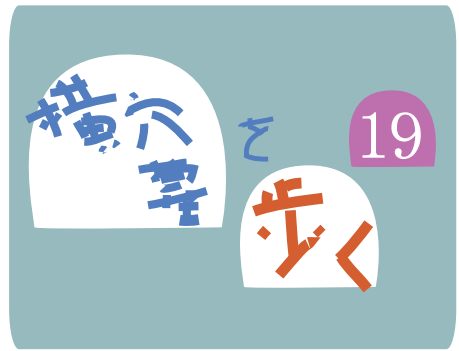
館出遺跡^{ただし}では、畑地整備事業に伴う事前の試掘調査が実施されました。確認された弥生時代の住居跡からは、弥生時代後期中根式の大形壺形土器が出土しました。また、本郷東遺跡^{ほんごとうがし}の発掘調査では、火事にあつた古墳時代住居跡床面から、重ねられた状態の杯類^{さき}が、大量に出土しました。いずれの遺跡も、これまで様相がよくわからなかった遺跡でしたので、郷土の歴史を知る貴重な資料となりました。

こうした埋蔵文化財の調査は、遺跡の地権者をはじめ、多くの方々のご協力とご理解によって実施しています。今回の小展示を開催するにあたり、調査に関係された皆様のご厚意に、深く感謝申し上げます。（佐々木義則）



「女子大生と装身具」の拡散

(2017.10.7 ~ 2018.1.28 茨城県自然博物館第70回企画展「サメ展」)



宮城県亶理郡山元町
合戦原遺跡の横穴墓群

山田 隆博

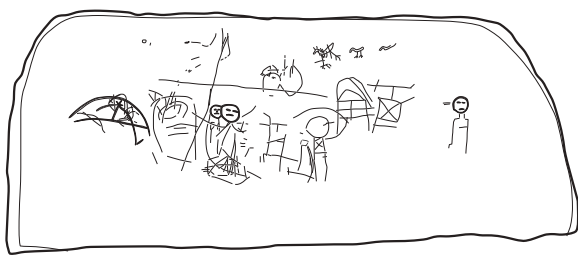
(山元町教育委員会)

合戦原遺跡は、宮城県亶理郡山元町合戦原地区、JR常磐線山下駅から約二・五km南に位置する国立病院機構宮城病院周辺に広がる古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡で、阿武隈山地から東に延びる標高一五〇～三五mの丘陵上に立地する。平成二六～二八年にかけて、東日本大震災の復興事業「防災集団移転促進事業」に伴い実施した発掘調査によって五四基の横穴墓を確認した。

横穴墓は、標高二二～三〇mの緩やかな丘陵南斜面を中心に横方向に配置されている。横穴墓玄室の平面形は、方形を基調とするものが主体であるが、逆台形・楕円形・不整形のものもある。玄室規模は、最大幅約三m前後の大型、一・五m前後の中型、一・五m前後の小型のものがある。天井形はドーム形が大半を占めるが、家形のものや平天井のものもわずかにみられる。玄室底面に台床をもつものは一基のみで、その他は平坦である。底



合戦原遺跡 横穴墓群全景（南から撮影）



【38号墓 奥壁】



合戦原遺跡 38号横穴墓玄室奥壁の線刻壁画

面に敷石をもつものは四基確認されている。玄門入口には、閉塞石が残存するものが多い。墓道は、検出長三〇m前後のものが主体であるが、中には長さ二〇m以上のものもあり、長い墓道を持つ構造が本横穴墓群の特徴といえる。玄室壁面に装飾を伴う横穴墓は四基あるが、いずれも線刻によるものである。このうち、最も多くの図文が認められた三〇号墓奥壁には、人物・動物（鳥）・鞍（うま）？・家屋？・植物（木の葉？）、その他多数の図文が描かれており、東北地方の線刻壁画を伴う横穴墓としては稀有な存在と言える。

出土遺物は、土師器、須恵器、勾玉・切子玉・管玉・ガラス製小玉などの玉類、装飾付大刀・

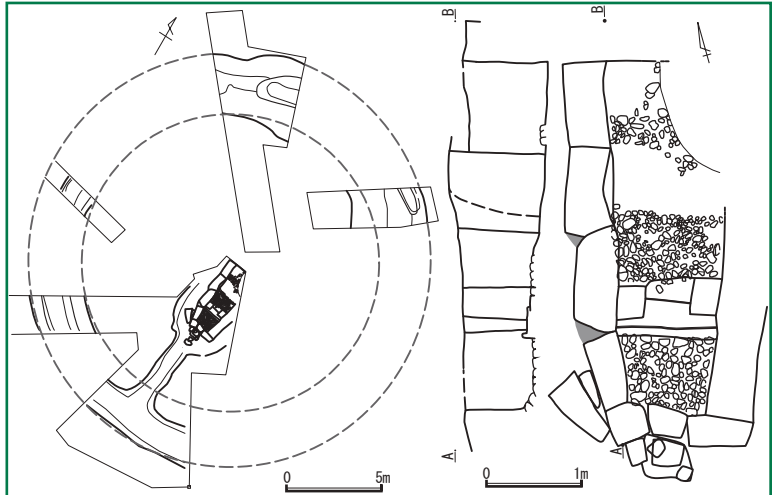
直刀・蔽手刀・刀子・弓金具・鉄鏃・馬具などの金属製品が出土した。馬具には、銅製・金銅製のものも含まれており、鐙・轡・帶金具・杏葉・雲珠など、豊富な様相を示す。特に、銅製壺鐙は東北地方で初の出土である。

横穴墓の造営時期は、出土土器の特徴から概ね七世紀後半から八世紀前半を中心とする年代に使用されていたものと推定される。その造営主体については、多様な図文の線刻壁画をもつ横穴墓の存在や銅製馬具を含む豊富な副葬品の内容から、中央政府と交流をもった有力者である可能性が考えられる。



田彦古墳群

古墳群古墳分布図（写真は1945年撮影）



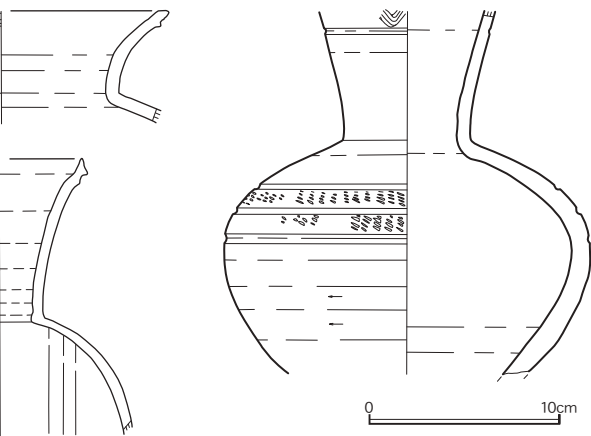
古墳全体図と石室



古墳全景



石室全景



相対古墳群第2号墳（1988年度調査）

埴輪のように紺色系顔料が塗布された埴輪は、久慈川下流域を特徴的にみられるもので、当地域の独自性を示すものとされています。

見学ガイド

- * 田彦古墳群は吉田神社境内にある第1号墳の見学はできます。
- * 相対古墳群は見学できません。

ひたちなか市の古墳

11 田彦古墳群・相対古墳群

田彦古墳群は、ひたちなか市の西北部、那珂川支流の中丸川上流の台地上に位置しています。古墳は現在 10 基が登録されていますが、記録によると前方後円墳 1 基と円墳 21 基が点在していたとされています。円墳の規模は直径 15～25m です。発掘調査は、那珂湊第一高校（現：那珂湊高校）史学会によって前方後円墳を対象に実施されています。前方後円墳の規模は小型で、墳丘上からは埴輪が出土しています。埋葬施設は、粘土床とされています。出土した埴輪は高校に保管されていましたが、現在武人埴輪の基部はひたちなか市埋蔵文化財調査センターに移管されています（下写真右）。また、数年前には、田彦在中の市民の方から武人埴輪 1 体と基部 1 個が寄託されました。寄託された基部と高校から移管した基部は同じ形であることから、寄託された埴輪は前方後円墳に樹立していたものと考えられます。武人埴輪は、頭部に衝角付きの冑を被り、胴部には挂甲を着用しています（下写真左）。寄託された基部にも挂甲の表現がみられます。3つの埴輪には、紺灰色の塗布が眉・口の周囲から顎にかけてと、胴部の挂甲や帯など各所にみられます。埴輪の胎土から、久慈川流域で製作された可能性がある埴輪です。

相対古墳群は、ひたちなか市南部の中丸川中流の三反田台地上に位置しています。古墳は2基が確認されており、第2号墳を1985年と1988年に市教育委員会が調査を実施しています。第2号墳は墳丘の盛土がほとんど残っていませんでしたが、周溝が確認されたことから直径約16mの円墳であることが判明しました。埋葬施設は凝灰質泥岩の切石を使用した横穴式石室です。天井部はすでに失われていました。石室は前室と後室からなる複室構造で、床面には礫が敷いてありました。石室の規模は、玄室長約4.0m、幅約1.1mです。玄門部には板石状の閉塞石がみられます。石室内から出土遺物はありませんが、周溝から須恵器の大甕や長頸壺、フラスコ形長頸瓶などが出土しています。古墳の時期は7世紀中ごろと推定されます。この古墳の石室と似た構造の例は市内にはありませんが、東海村須和間古墳群第12号墳の石室と似ています。



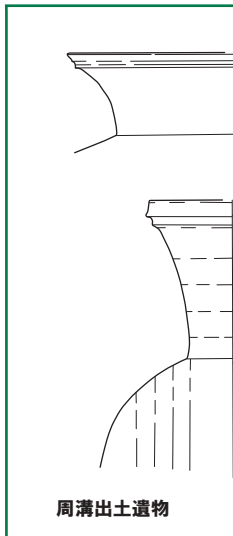
田彦

古墳名	墳形	規模(m)	備考
1号墳	円墳	直径22、高さ1.5	墳丘上に吉田神社が建っているため、墳頂部が削平されている。
2号墳	円墳	直径10、高さ2.5	個人宅内にある。
3号墳	円墳	直径10、高さ1.0	個人宅内にある。
4号墳	円墳	直径25、高さ3.0	東側と西側が大きく削平されている。
5号墳	円墳	直径20、高さ1.5	個人の墓地敷地内にある。
6号墳	円墳	直径20、高さ2.0	個人の墓地敷地内にある。
7号墳	円墳	直径20、高さ2.5	保存状態はよい。墳頂部に祠あり。
8号墳	円墳	直径15、高さ1.5	東側が削平されている。
9号墳	円墳	直径10、高さ1.0	古墳ではない可能性がある。
10号墳	円墳	直径10、高さ1.5	個人宅内にある。

田彦古墳群一覧（〔住谷1982〕に一部加筆）



田彦古墳群出土武人埴輪



周溝出土遺物



ミニ知識

田彦古墳群出土の武人中心とした地域に限定せず〔稲村1994〕。

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

* 参考文献：稲村 繁 1994 「紺」色考『風土記の考古学①』『常陸風土記』の巻』同成社 245-267頁
住谷光男 1982 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和56年度版』勝田市教育委員会

鴨志田篤二 2004 「武人埴輪寄託される」『ひたちなか』10号
住谷光男 1985 「相対遺跡・相対古墳群」『ひたちなか』10号

活用なくして保存なし 遺跡の保存活用についての考え方は、戦後七〇年が経過して大きく変わった。文化財は今日まで指定制度を根幹としてきた。国指定・県指定・市町村指定である。その枠を超えて世界遺産が登場し、また新たに日本遺産ができた。国・県・市町村の指定とは別に登録文化財が制定され、またユネスコが和食を日本の文化遺産に認定すると、堰を切ったように各地の地方自治体が郷土食を無形民俗文化財に指定するようになった。指定制度という文化財保存の体系は今日、混とんとしている。更に保存を基本とした文化財問題は活用という側面が強調され、地方の活性化や観光資源化などの方向に動き始めている。そういう方向は地方創生などの動きとともに加速していくであろう。

活用では資料館や博物館の「もの」の展示が中心であったが新たに映像による展示のような方向が目指されている。こうした変化に多くの市町村教育委員会の担当者、文化財関係者とも傍観者である。

保存・活用の新たな方策 二〇一五年、文化庁は指定の在り方について新たな方策を打ち出した。日本遺産の登録である。行政の枠を超えた広域連携による日本遺産登録と一つの自治体内の遺跡からなる日本遺産登録の方向である。水戸市は栃木県足利市、岡山県備前市、大分県日田市との連携で近代日本の教育遺産群の登録を目指している。日本遺産群の構成には若

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第20回 遺跡保存・活用の新たな方向を目指して



泉坂下遺跡現地説明会 (2015.10.4 撮影)



川崎 純徳

干の条件があるが、文化遺産活用と保存の有効な手段となるものであろう。こうした方向から自分たちの遺跡を見直していく必要がある。茨城県内には日本遺産のテーマとなるような遺跡群が多い。

指定制度による文化財保存はすでに限界にきている。郷土食の文化財指定はその象徴であり、また地方自治体が市町村遺産、登録文化財などの制度化を始めているのは、その表れであろう。

文化財の持つ側面 文化財は観光資源としての側面も持つものであり、また住みよい街作りの骨子ともなる。また、生涯学習の拠点、超高齢化(長寿)社会における対応等、史跡の生かし方は枚挙にいとまがない。長寿社会においては住民の健康で長生きは医療費、介護費の低減につながる事を忘れてはならない。

活用の在り方は整備の形につながってくるものであるから、自治体の意向も取り入れながら慎重な議論がなければならぬ。それが史跡であることを考えれば、何でもありの整備と違うわけにいかないことは自明のことである。調査により確認された事実に基づいた整備が必要であることは言うまでもない。史跡は遊園地ではないし、遊具設備もいらぬのである。

*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一三回(埋文だより)第四一号)に掲載してあります。



ドの石材の種類や大きさを実際に目の当たりにしている。

ピラミッドの建設については、古代エジプトの建築学が専門である東日本国際大学客員教授の柏木裕之先生を特別ゲストとして講座に迎え、ピラミッドの作り方について解説していただいた。ピラミッドの積み方は、二種類あると考えられている。一段ごとに水平面を造って箱のように積み上げていく方法と、ピラミッドの中心になる場所に石材を塔状に積み上げた後、その周りにタマネギのように段を積み上げる方法である。ふるさと考古学でもこの二種類の積み方を試すことにした。なお、ピラミッドの頂上に設置するキャップストーンはふるさと考古学ボランティアの海老原四郎さんに製作していただいた。

ピラミッド建設体験は、午前と午後の二回に分けて実施した。午前はピラミッドの石材や運搬方法の話をした後に箱型の積み方の方法を説明し、再度建設予定地を水平にするところから始めた。午後は柏木先生によるピラミッドの構造の解説の後、二回目のピラミッド造りをおこなった。

午前はピラミッド基底部のみ何とか積みあげたが、二回目は子供たちの希望でタマネギ型の積み方でつくり、みるみるうちにピラミッドの「芯」の部分の石積みが完成した。また、作業は石を積みむ班と石を運ぶ班に分かれて実施したが、運ぶ班では全体を指揮する役割分担が自然と決まり、約七〇〇個のレンガをあつという間に運び終えた。

今回のピラミッド建設は初めての試みであったため、作業スピードの予測がつかず、ピラミッド基底部を積んだところで終了すると考えていた。しかしピラミッドの積み方について理解を深めた後の子供たちは、お互いに指示を出し合いながらほとんど自分たちの力でレンガを積み上げていった。これは嬉しい誤算であった。自分たちで工夫しながらレンガを運び、積み上げるというピラミッド建設の体験が、遺跡への興味が深まるきっかけになればと思う。

初めての試みばかりのワークショップであったが、埋蔵文化財調査センターの皆さん、座長のさかいひろこさんと矢野徳也さん、特別ゲストでご参加いただいた柏木裕之先生、ボランティアの皆さんのご尽力によって無事に終わることができた。

現在建設中の小さなピラミッドが今後のワークショップで果たして完成するのか、私自身も楽しみにしている。



(2017.10.28)

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターの敷地の一角には、建設中の小さなピラミッドがある。これは、二〇一七年一〇月に開催されたワークショップ「ふるさと考古学」の講座「ピラミッドをつくらう」で子供たちの手によってつくられたものだ。小さなピラミッド建設の始まりは、二〇一六年のふるさと考古学だった。そこで私たちは「記録する考古学」と題した講座をおこない、古代エジプトの測量器を作成し埋文センターの敷地の一角を「ピラミッド建設予定地」として平らに整地したのである。

私の所属する三井考測は、東日本国際大学エジプト考古学研究所によるギザ台地西部墓地探査プロジェクトに参加しており、年に二回現地での調査をおこなっている。そのため、クフ王のピラミッ

このは 木葉の底

—茨城県北部域における弥生式土器の底面痕跡—

鈴木 素行



立てた状態で展示してあると、土器の底面はまず見ることはできません。しかし、**そこ**には土器を製作した際の敷物の痕跡が残されていることがあります。木葉を敷いた痕跡、「木葉痕」について、いくつか樹木の種類を調べてみました。弥生時代に、どのような木葉を利用していたのか、その研究の第一歩です。

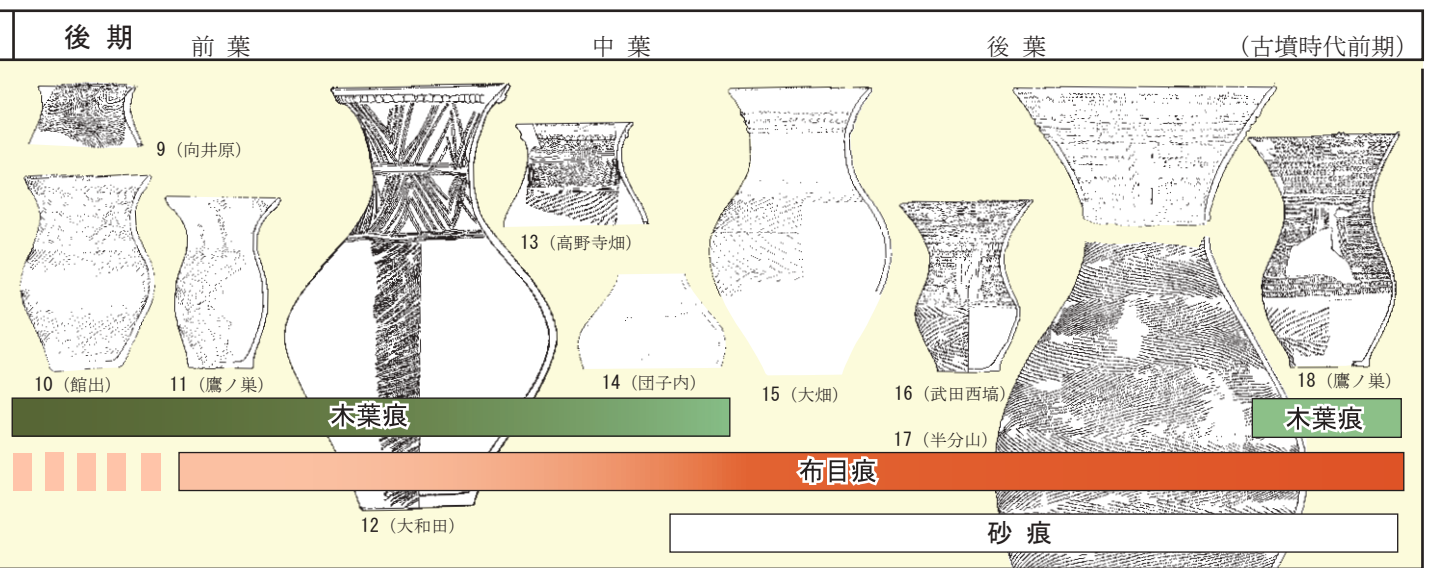
1 土器の底面痕跡

轆轤ろくろを使用しない土器製作では、作業のために土器を回転させる工夫が必要である。手ごころな敷物の上で製作すれば、底面を作業台に接着させずに土器を回転させることができるようになる。その圧痕と見られる痕跡が、敷物の種類から木葉痕、網代痕、布目痕等と分類されている。また、土器底面に多量の砂粒を付着させても同じ効果が得られることから、これも土器製作の痕跡として砂痕と呼んでいる。茨城県域の弥生式土器には、この四つの底面痕跡が確認されており、本稿では、木葉痕を検討の対象とする。

2 底面痕跡の変遷

底面痕跡のあり方は、弥生時代でも時期により、茨城県内でも地域により、状況が異なる。茨城県北部域における底面痕跡の変遷(図二)は、弥生時代前期から中期前葉までが木葉痕、中期中葉から後葉までが布目痕、後期前葉から中葉までが木葉痕をそれぞれ主体とする。後期後葉には、久慈川流域が砂痕、那珂川流域が布目痕を典型として「十王台式」が製作されていた。茨城県南部域は、後期を通して木葉痕が支配的であり、これが北部域とは異なる。

底面痕跡は、土器型式の属性の一つでもある。土器製作の技法として共有し継承され、一定の空間と時間を占めて系統が捉えられる。文様の変化より保守的であるが故に、底面痕跡の交替には、他系統の土器群の大きな関与を認めるこ



(土器実測図は各遺跡の報告書等より引用)

ともなる。

3 木葉痕の先行研究

那珂川流域では、一九五七（昭和三〇）年に大賀一郎・井上義安・佐藤次男による布目痕の研究、一九八八（昭和六三）年に高岡正之・橋本澄朗による木葉痕の研究が報告されている。

大賀等による布目痕の研究は、弥生時代後期の底面痕跡から、当時に織られた布の経緯構造を復元するものであった。「大賀法」と呼ぶ湿拓で布目痕を型取りし、これに斜めから光を当て撮影した資料が作成されている。木葉痕についても同様に撮影し「ヤマハンノキ」「カシワ」と解説された写真が掲載されているが、その詳細は記述されなかった。

高岡・橋本による木葉痕の研究は、木葉痕か

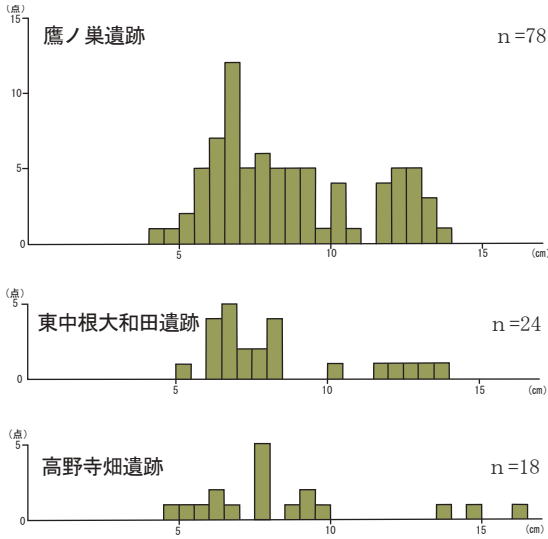


図2 木葉痕の底径分布
(横軸は底径, 縦軸は底部点数)

ら樹種を同定する基礎を検討した上で、弥生時代後期から平安時代までの木葉痕の樹種を同定した。その対象遺跡に那珂川流域の水戸市大塚新地遺跡等（石井他一九八二）が加えられている。植物を専門にする高岡は、木葉痕の大きさ（図二参照）や葉脈の構造などから、候補となる大型で葉脈の類似した植物を選出し、齒科用シリコン製素材で木葉の表裏の圧痕について標本を作成した。この標本と土器の木葉痕を比較し、類似を確認しながら同定が実践されている。弥生時代後期の木葉痕は「カシワ」が圧倒的に多く、他には「トチノキ」が同定された。残存状態から同定に至らない木葉痕は「カシワ型」と表記され、その一つに「オヤマボクチ型」（オヤマボクチはキク科の多年草）が見られる。同定結果をもとに、高岡は木葉の選択や土器製作の季節、橋本は土器製作の技術等について考察を加えた。この調査で確認された「底面に複数の木葉痕がみられるもの」は、「複数の木葉を同時に使用したのではなく、前後関係・重複関係を示すもの」であったという。

4 木葉痕の標本と解説

木葉痕から木葉の樹種を絞り込むために図鑑を参考に用いたが、特に吉山寛・石川美枝子『原寸イラストによる落葉図鑑』は、木葉の線描が掲載されていて葉縁や葉脈の特徴を比較するのに便利であった（図三・A）。

また、カシワやトチノキなどいくつかの樹種については、砂粒を混ぜた粘土で木葉の圧痕の

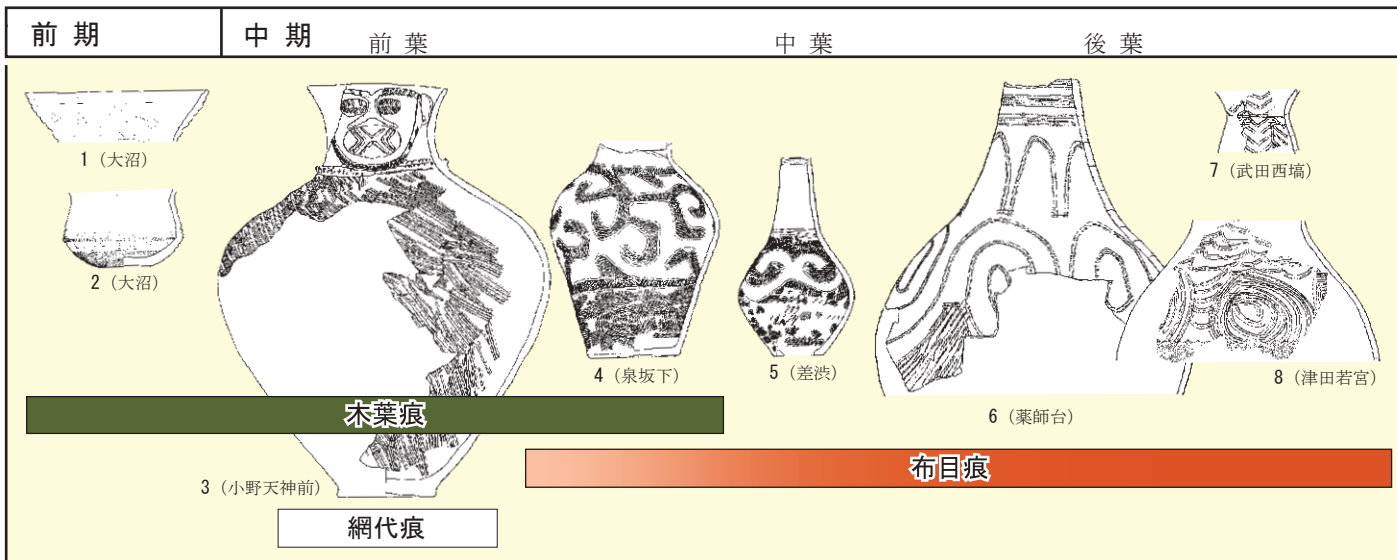


図1 茨城県北部域における底面痕跡の変遷

他の参考文献② 佐々木義則編 2017『平成 28 年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会／鈴木素行編 2011『泉坂下遺跡の研究』（私家版）／鈴木素行 2014『縄文時代とのつながり』『ミッション!!「東日本の弥生時代を解明せよ」』常陸大宮市歴史民俗資料館 10 頁／吉岡秀範他 1995『栃木県上三川町殿山遺跡 I』（町報告第 13 冊）上三川町教育委員会

標本を製作し、これを焼成した(図三-B)。中小型土器の底径に相当する円形の枠で粘土を型取りしてあり、まずは、この枠の直径と焼成後の粘土板の直径を比較して、縮小率を確認した。今回作成した粘土板の標本のうち七点を抽出した平均の縮小率は六・九三%である。例えば80mmの底径は75mmほどに縮小するということ。粘



図3 木葉と木葉痕の標本 (Aは吉山・石川1992より加筆引用)

土・混和材や含水量などの条件で異なるとしても、布目痕の糸の太さなど、微細な痕跡について考察する場合には、無視し得ない数値となる。圧痕の粘土板は、表裏それぞれの面について製作した。裏面の方が葉脈の微細な構造が判明し、葉縁^{ようえん}までの圧痕が残されていれば同定の精度はより高くなる。

本稿に関わる木葉について、主に『原寸イラストによる落葉図鑑』から解説を引用しておく。

カシワ(1) 落葉高木。単葉、葉縁：深い波状鋸歯、側脈：八〜一二対、長さ一〇〜三〇cm、幅六〜一八cm。(粘土板標本を製作)

トチノキ(2) 落葉大高木。掌状複葉(五〜七枚)、葉縁：不整鈍重鋸歯、側脈：二〇〜三〇対、中央小葉の長さ一三〜三五cm、幅五〜一六cm。(粘土板標本を製作)

クス(3) つる性落葉樹。複葉(三枚)、葉縁：全縁、側脈：六〜八対、側小葉の長さ五〜一四cm、幅六〜一四cm。

コナラ(4) 落葉高木。単葉、葉縁：鋭く粗い鋸歯で側脈と同数、側脈：二〜一四対、長さ九〜一六cm、幅四〜六cm。

アオキ(5) 常緑低木、単葉、葉縁：粗鋸歯、側脈：七〜一〇対、長さ一〇〜二〇cm、幅四〜八cm。(粘土板標本を製作)

アカガシ(6) 常緑高木。単葉、葉縁：ほとんど全縁、側脈：八〜一五対で、オオアカガシは長さ一七〜二三cm、幅六〜一一cm。

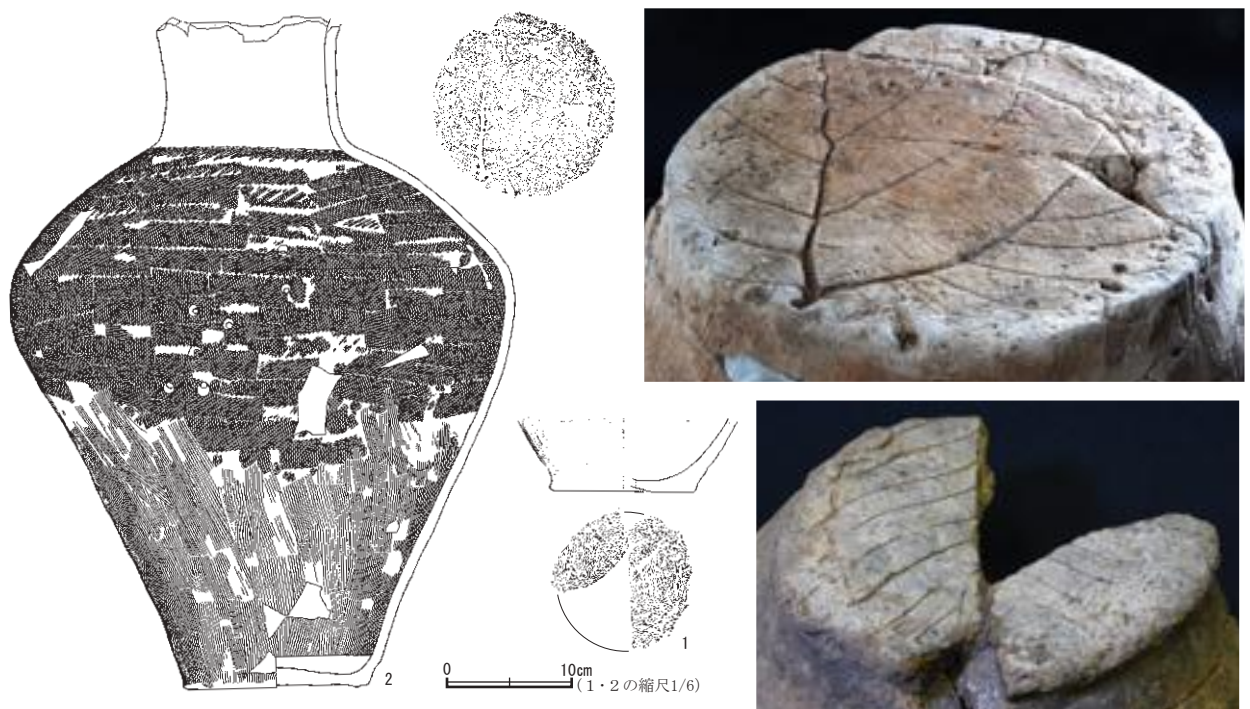
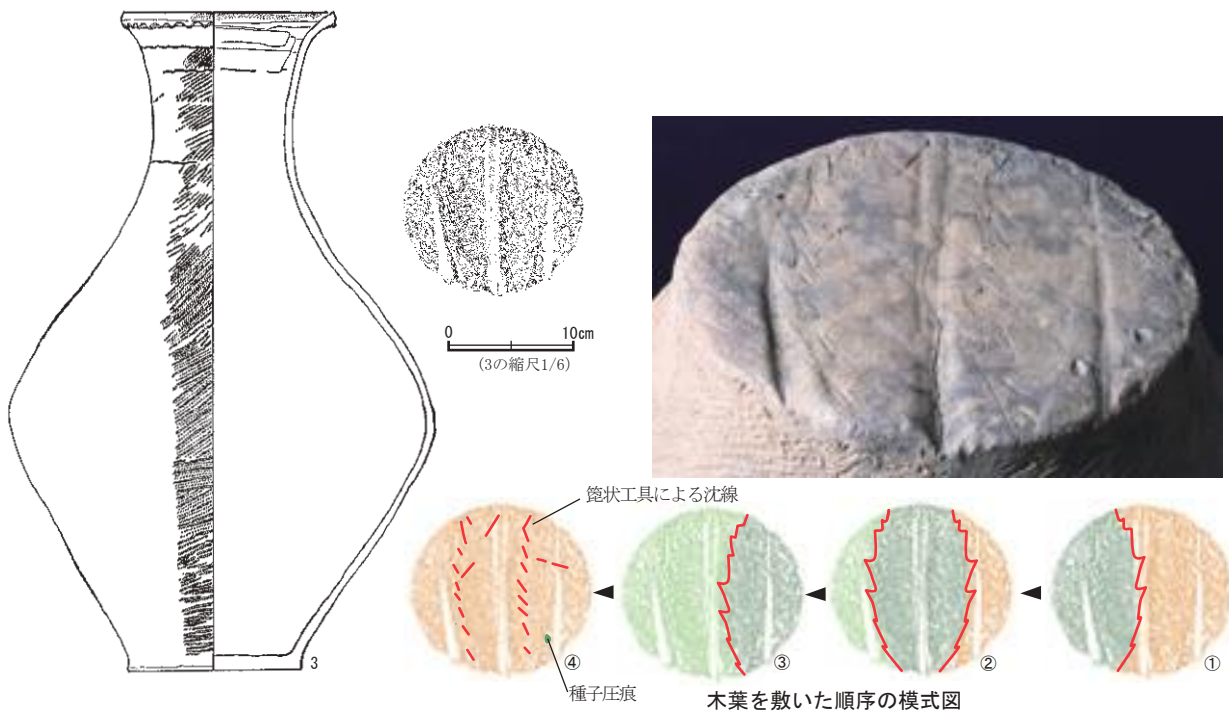


図4 弥生時代前・中期の木葉痕



4 木葉痕の観察

高岡・橋本が同定したように、茨城県北部域には、カシワとトチノキにそれぞれ葉脈の特徴が似た木葉痕が認められる(図三・c)。それは、弥生時代の後期だけでなく、前期の日立市大沼遺跡(川崎他一九七七)にもトチノキに似た木葉痕が検出されていた(図四・1)。しかし稀ではあるが、いくつかの遺跡にカシワやトチノキ以外の木葉痕を見出したので、これらを紹介する。

泉坂下遺跡 遺跡は、久慈川流域の常陸大宮市に所在し、弥生時代中期前葉の再葬墓群が調査されている(鈴木編二〇一)。第五号墓壙の土器四の木葉痕を掲載した(図四・2)。土器の底径は146mm。木葉裏面の圧痕が残されており、右下の側脈から派生した明瞭な三次脈が特徴的で、

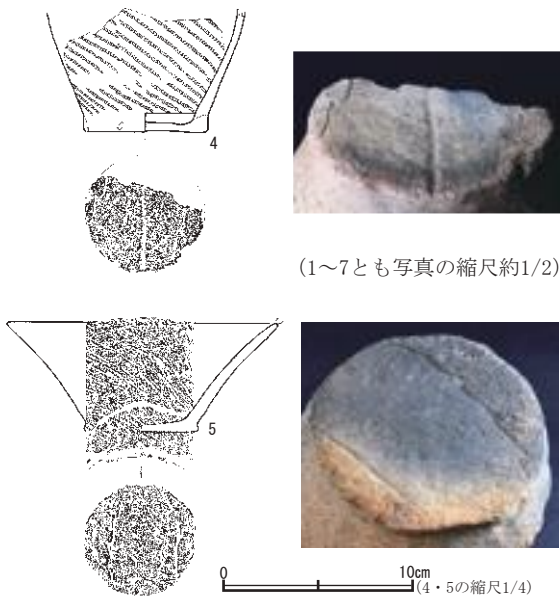


図5 弥生時代後期の木葉痕(1)

細脈の構造とともにクズの側小葉によく似る。

東中根大和田遺跡 遺跡は、那珂川流域のひたちなか市に所在し、弥生時代後期中葉の集落跡が調査されている(川崎一九八二)。Y五号住居から出土した「リ群土器」の木葉痕を掲載した(図五・3)。土器の底径は135~145mm。木葉表面の三枚が、半葉分を重ねながらほぼ平行に圧痕として残されている。主脈と葉縁から一枚分の幅は8cmほどと推定され、一枚では底面を被い尽くせないことから、三枚を並べたものと考えられる。これを「半葉送り三枚重ね」と呼んで、注意を促しておきたい。葉脈は不鮮明であるが、葉縁の形状はコナラによく似る。木葉痕の他にも、底面には種子(粃)圧痕が観察され、さらに篋状工具で短沈線が描かれている。これは、葉縁の圧痕に沿うよう二列に並ぶことから、不慮の傷ではなく、動機があつて加えられたものと判断される。

高野寺畑遺跡 遺跡は、新川流域のひたちなか市に所在し、弥生時代後期中葉の集落跡が調査されている(川崎他一九七九)。I一八号遺構から出土した土器の木葉痕を掲載した(4)。土器の底径は64mm。木葉表面の圧痕が残されており、主脈と葉縁から一枚分の幅は7cmほどと推定される。これも、葉縁の形状はコナラによく似る。胎土に金雲母と多量の骨針を含むことから、土器の製作地は久慈川流域以北と推定される。

落神遺跡 遺跡は、涸沼川流域の大洗町に所在し、弥生時代後期中葉の集落跡が調査されて

他の参考文献① 石井毅他 1981『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団/井上義安他 2001『落神遺跡』(大貫台地報告第4冊)大貫台地埋蔵文化財発掘調査会/川崎志郎他 1977『日立市大沼遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会/川崎純徳他 1979『高野寺畑遺跡調査報告書』勝田市教育委員会/川崎純徳 1982『勝田市史 別編Ⅱ 東中根遺跡』勝田市

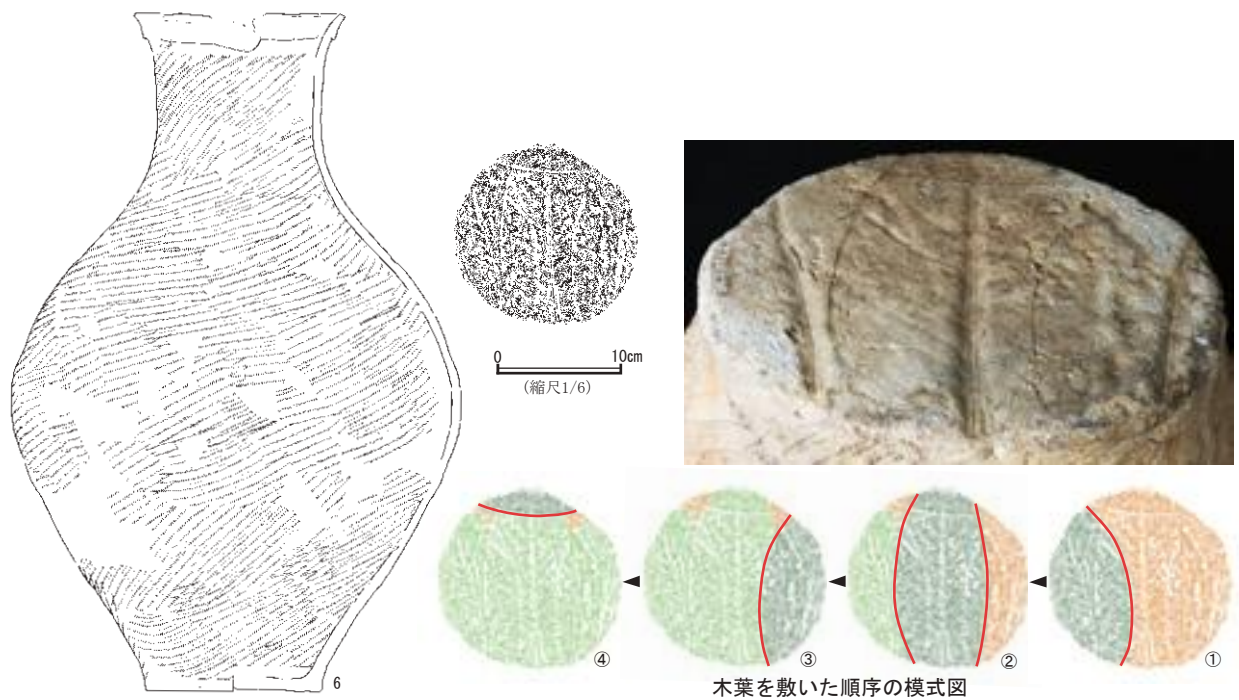


図6 弥生時代後期の木葉痕(2)

いる(井上庵二〇〇一)。第一四二号住居址から出土した鉢形土器の木葉痕を掲載した(5)。土器の底径は60mm。木葉表面の圧痕が残されており、主脈と葉縁から一枚分の幅は7cmほどと推定される。葉縁の形状と側脈がアオキによく似る。

館出遺跡 遺跡は、那珂川流域のひたちなか市に所在し、弥生時代後期前葉の集落跡が確認されている(佐々木編二〇一七)。第三号住居跡から出土した土器の木葉痕を掲載した(図六・6)。土器の底径は140mm。木葉表面の「半葉送り三枚重ね」に加えて、これと直交する方向で隙間を被うように一枚が重ねられている。主脈と葉縁から一枚分の幅は8cmほどと推定される。葉脈が不鮮明で葉縁にも顕著な特徴を持たないが、アカガシに似ており、オオアカガシと呼ばれる木葉が大きさも相応する。

5 底面痕跡への視線

弥生時代における茨城県北部域の木葉痕について、カシワとトチノキ以外にも四種の木葉痕を確認し、また、複数の木葉を敷いたと推定される二つの事例を紹介した。四種の木葉痕については、近似する樹種の候補を指摘したが、同定のためには、今後さらに検討が必要である。土器製作の道具として身近に入手できるという以外の条件が、木葉の樹種の選択に働いていたかという課題は、このような観察の後に設定されるべきものであろう。

ただ、底面痕跡に全く頓着がなかったわけではない。東中根大和田遺跡の土器には、底面へ



図7 栃木県殿山遺跡の底部

に持ち込まれた、那珂川下流域「十王台式」の布目痕を模倣して製作されたものと考えている。製作する土器の底面痕跡にも目を向けていた事例として紹介しておきたい。

本稿の成立には、小幡和男氏(茨城県自然博物館)より多大なご指導をいただきました。記載に誤りがあるも、それは筆者の責任です。

参考文献 大賀一郎・佐藤次男・井上義安一九五七「茨城県那珂川流域出土の弥生式土器(底面の布目文について)」(布目文の研究第五報)、『古文化財の科学』第一四号 八―一六頁/高岡正之・橋本澄朗一九八八「木葉底の基礎的研究」『栃木県立博物館研究紀要』第五号 二七―八二頁/馬場多久男一九九九「葉でわかる樹木」信濃毎日新聞社/吉山寛・石川美枝子一九九二「原寸イラストによる落葉図鑑」文一総合出版(第三版による)

他の参考文献は一五・一七頁の下余白に掲載した。

※「木葉の底」には、以下の個人及び機関にご協力をいただきました。小幡和男氏・海後晴美氏・国府田良樹氏・蓼沼香未由氏・津野田陽介氏・星直斗氏・森嶋秀一氏、茨城県自然博物館・大洗町教育委員会・上三川町教育委員会・栃木県立博物館・常陸大宮市歴史民俗資料館・日立市郷土博物館(50音順)

文 埋 センターの 日々 2017 前期

10月

1 新垣清貴氏(水戸市教育委員会資料調査原の寺遺跡瓦) / 3 秘境駅の旅取材



3 市毛下坪遺跡試掘調査終了 / 5 那須塩原市公民館おもと学級見学 / 8 ときわ会虎塚清掃 / 9 くらし共同館なかよし見学 / 10 三反田小学校5・6年生へ三反田遺跡現場説明会



10-12 黒袴遺跡試掘調査 / 15 ふるさと考古学⑦「さわって楽しむ考古学」(講師・広瀬浩二郎氏) / 16 ひたちなか市指定文化財指定

〔十五郎穴横穴墓群館
出I区35号墓出土遺物
一括・蔵手刀ほか〕



17 中根小学校2年社会科見学 / 21-22 別所鮎美氏(明治大学院生)資料調査(大貫落神具塚縄文土器)



25 三反田遺跡本調査終了 / ひたちなか市指定文化財指定記念特別展示「十五郎穴横穴墓群館出I区35号墓出土遺物」開始 / 筑西市健康大学見学 / 26 中根小学校1年生どんぐり拾い



27 茨城県学校生活協同組合見学 / 28 ふるさと考古学⑧「ファミックドをつくろう」(講師・梅田由子氏) / ワンケースミュージアム44「市



ピラミッドをつくろう

内遺跡調査2016」開始 / 31 筑西市婦人会見学 / 『埋文だより』第47号発行

11月

2 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学 / 神栖市歴史民俗資料館見学 / 松戸市つれづれ友の会見学 / 2-5 虎塚古墳一般公開 / 3 ふるさと考古学⑨「道具の考古学」(講師・堀江武史氏) / 4 ふるさと考古学⑩「壁面の考古学」(講師・堀江武史氏)



海老原四郎氏より資料寄贈(勝倉地区採集艦砲弾片) / 5 公益財団法人元興寺文化財研究所より資料返却(武田西端遺跡小札ほか) / 7-9 本郷西遺跡試掘調査 / 9 神栖市歴史民俗資料館見学 / 県北生涯学習センター見学 / 9-12 虎塚古墳一般公開

虎塚古墳
花便り

20 タチツボスミレ

今回ご紹介する花は、四月に虎塚古墳周辺でもっともたくさん見ることの出来る花のタチツボスミレ(立坪葎)です。タチツボスミレはスミレ科スミレ属の多年草です。四月から五月ごろに小さな薄紫色の花が咲きます。葉は丸いハート形です。スミレ属は種類が多く、所謂「スミレ」は花の色が濃い紫色で、葉は細長い矛形ですので、タチツボスミレとは見分けが付きまます。「スミレ」の名前の由来ですが、花の形状が大工道具の墨入れ(墨壺)に似ているからという説があります。虎塚古墳の公開は一九八〇(昭和五五)年から始まりましてので、あと二年で四〇年になります。スミレの花ことは「謙虚」「誠実」「小さな幸せ」とありますので、「今後も謙虚で誠実に保存を続け、公開時に訪れた方に小さな幸せをお届けできるように努めなさい」と、この花が咲いているように思えます。(稲田健一)



2015.4.17

10 中根小学校6年生社会科見学
／ニクラブツリズム見学／
ひたちなか市指定文化財指定記念
特別展示終了／土浦市立博物館
館長講座見学／サイクリングDE
たちなか2017見学」



14-15 市毛上坪遺跡試掘調査／21
高野富士山遺跡試掘調査開始／
25 ふるさと考古学⑩「フィールド
探検」(講師・矢野徳也氏)／28 水
戸市飯富小学校5年生社会科見学
12月
5 高野富士山遺跡試掘調査終了／
荒谷地区試掘調査開始／5-伐採



5-15 三反田古墳群試掘調査／10
ふるさと考古学⑫「すくく楽しい
考古学」(講師・さかいひろこ氏)
／隊友会ウォーキング見学／7



三反田古墳群第14号墳

ンケースミュージアム44終了／
19-20 西中根遺跡・宿ノ内試掘調
査／27 岩宿博物館より資料返却
【武田石高遺跡ナイフ形石器ほか】

1月

7 ひたちなか市史跡保存対策委員
会／10-13 岡田遺跡試掘調査／
16 二市毛上坪遺跡本調査開始／19
小貫山遺跡試掘調査／19 『鷹ノ
巣Ⅲー第4次調査の成果』発行／
30-31 上馬場遺跡試掘調査
2月

6 ミュージアムパーク自然博物館
より資料貸出(上ノ内貝塚垂飾)／7 市
毛上坪遺跡本調査終了／10 第15
回企画展「虎塚古墳の時代」開始
／13 地藏根遺跡試掘調査／17 ひ
たちなか市の考古学第11回①「古
墳の終わりー日本と世界の視点でー」(講
師・松木武彦氏)／24 ひたちなか
市の考古学第11回②「栃木県南部
の終末期古墳」(講師・小森哲也氏)
／26 中根自治会へ出張講座「虎塚

古墳・十五郎穴横穴墓群」／27 遠
原遺跡試掘調査開始

3月

3 ひたちなか市の考古学第11回③
「ひたちなか市の古墳の終わり」
(講師・稲田健一)／5-31 高野富
士山遺跡本調査／6-8 平磯長堀南
遺跡試掘調査／7 遠原遺跡試掘調
査終了／10 ひたちなか市の考古
学第11回④「東日本の古墳の終わ
り」(講師・日高慎氏)／14 平成29
年度市内遺跡発掘調査報告書』発
行／市毛上坪遺跡試掘調査／20
小澤眞智子氏より資料寄贈(土師器
ほか)／渡邊明氏より資料寄贈(上高
井遺跡片面硯ほか)／高橋武夫氏より資
料寄贈(縄文土器ほか)／25 荒谷地区
試掘調査終了／29-31 虎塚古墳一
般公開／31 『埋文だより』第48号
発行

入館者状況 (2017.10.1.～2018.3.31)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
10月	26	113	10 (2)	240 (85)	353	
11月	26	1201	15 (3)	387 (120)	1588	
12月	23	85	3 (0)	77 (0)	162	
1月	23	98	2 (0)	19 (0)	117	
2月	24	121	2 (0)	98 (0)	219	
3月	27	733	2 (0)	107 (0)	840	
合計	149	2351	34 (5)	928 (205)	3279	

○内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び
(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が
開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記の
ホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

編集後記の
笑う埴輪

昨年一二月の夜中に、ひどい腹痛で救急車を呼んだ。朝まで我慢しても、日曜日で病院は休診ということも考えて判断した。寝台から足がはみ出てしまい、足裏にあたるリアウインドが冷たかった。病院に到着するまで救急隊員による問診が続く。その中で、「今の痛みを10とすると、以前の痛みはどのくらいですか」という質問には、しばし考え込んでしまった。「四・七七二」などと小数点以下三位まで即答しても人格を疑われるだけだろう。そもそも痛みを数値化した経験がない。「五：くらいでしょうか」などと濁して、救護者の意識を保とうとする気遣いに応えるのだった。病院では、直ぐにX線で腹部を撮影された。胃や腸に大きな損傷がないかを診るらしい。医師が「なにか模様が写っている」という。腹部に手を当ててみると、そこには、温めれば痛みが和らぐかと、使い捨てカイロが貼られたままなのであった。撮り直しはなく、緊急に手術を必要とするような状態ではないという。点滴を受け寝ていると、痛みが少しずつ引いていった。二〇〇〇年にロシアの山奥で、アムール川支流の湧水を飲んでから、八年に一度くらいの周期で胃腸が悲鳴を上げるようになった。



ロシア マリ5遺跡の調査 (2000.8.15)



ひたちなか埋文だより 第48号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2018年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷